

子どもの絵の表現特徴と芸術家の作品との類似性についての一考察

栗本 浩二

A Consideration of the Expression Characteristics of Children's Paintings and their Similarities to the Works of Artists

KURIMOTO Koji

キーワード 子ども 表現の魅力 純粋な感性類似性

はじめに

子どもの絵は興味深い。何が描かれているのかわからないものや、日常の何気ない風景を描いたものや、大好きな人の顔を大きく描いた絵からは子どもの純粋なまなざしや楽しい経験が見て取れる。子どもの絵には特有の魅力があり、見るものを引き付けることが多くある。子どもの絵には発達段階を踏まえた道筋があり、この時期特有の「知的リアリズム」の視点から描かれており、さまざまな表現特徴があることが、20世紀初頭のリュケらの研究以降、広く知られている。さらに、子どもの絵に関心を持っていた芸術家も少なくない。画家のクレーやピカソが子どもの絵について語った言葉を紹介し、芸術家が子どもの絵に対して何らかの魅力や独特な価値の認識について検討する。また、子どもの絵の描画表現の特徴を示した絵と芸術家の作品やプリミティブな絵画を比較し類似性や共通性について検討することで、子どもの絵の魅力を探ることを本研究の目的とする。

1. 子どもの絵の発達段階の特徴

子どもにとって、絵を描くということは、他の人とのコミュニケーションの手段であることのみならず自分の思ったことや考えたことを表し、絵

と対話をしながら無意識に集中し自分の好きなものや好きなことを自由に描く、自己解放の表出の場である。そこには生きている証としての喜びや新鮮な発見を画面に定着し、描きながらさまざまな追体験を行っているかのようなのである。それらの活動を通して成長する姿を感じることができる、まさしく子どもの描く絵は生きている証のようなものである。子どもの絵の表現の発達段階は、規則的な段階をたどるが、発達には個人差があり生活や文化などの環境や心身の発達によっても異なる。以下、子どもの造形的表現活動の発達段階と描画表現の特徴に触れていく。

1歳半から～2歳ごろは、なぐりがきの時期で手を動かすことができるようになるクレパス等を持ち、無意味な線を画面いっぱいに表出し、自分の描いた線に対して興味が湧き、繰り返し絵を描く時期である。2・3歳から4歳ごろは、象徴期とよばれ、手と目の動きが繋がりが円形が描けるようになり円形からの形の展開ができるようになる。4歳～8歳ごろは、図式期とよばれる時期で、創造力が一段と増し自分の興味や関心、観察力が豊かになり具体的なものが自分なりに描けるようになる。この図式期の子どもの描画表現の特徴として「アニミズム的表現」「レントゲン描法」「集中構図（集中比例法）」「展開描法（転倒式描画）」「多視点構図（観面混合）」「転倒式構図（折半式描法）」「積み上げ遠近法」「俯瞰表現」「基底線」などがある。これらの描画表現は主観的で自己中

心的であるがゆえに、子どもの根源的な捉え方などを垣間見ることができる。子どもは知っていることをすべて表現しようとするため、このような描画特徴が表れると言われている。リュケは、これを「知的リアリズム」と名づけた。7・8歳以降は、対象を写真のような見え方で表現する視覚的リアリズム的な捉え方によって変わっていく。

2. 芸術家が感じる、子どもの絵の魅力

芸術家からみた子どもの絵の魅力について考えてみる。20世紀のスイスの画家・美術理論家であるパウル・クレーは、早くから子どもの絵の独特な価値を認識していたといわれている。そのクレーの言葉について触れてみたい。ユルク・シュピラー（2016）は「造形思考上」において次のように述べている¹⁾。

「そこ（子どもの絵）には、なお芸術の始原というものがある」、「どこちなければどこちないほど、それだけ示唆に富んだ例を提供してくれる」。いずれも、子どもの絵から「芸術の始原」を発見し、さらに子どもの絵から新しい発想や純粋さを見つけ出そうとしていると考える。さらに子どもの「どこちなさ」には子どもたちが表現したいさまざまな気持ちやアイデアの糸口を見出しているかのように感じる。また「クレーは熱心に息子のフェリックスや親しい子供たちの絵を集めた。」ということからも同様のことが言えるのではないかと考える。画家のマティスは、クレーの仕事に対して「印象派の成果をもって、彼は芸術の小児段階に帰ってゆき、驚くほどの成果を出している。」という深い感動の言葉を記していることから、クレーの造形思考に子どもの絵が影響していることが考えられる。

また、ピカソは「私の子供のころはラファエルロみたいな絵を描いていたけど、この子供たちの描法を習得するため、ずいぶん長い年月がかかってしまった。」という言葉を残している（坂崎乙郎、1980）²⁾。ピカソのように幼少期から卓越したデッサン力を持ち、絵画に革命を起し第一線で活躍した画家でさえも、子どものように自由な

感性を得ることは難しく時間がかかったということが推測される。ピカソやその他の芸術家にとっても純粋無垢に自由奔放に描く子どもの絵に魅力を感じていた芸術家は少なくないと感じる。

筆者は、絵画作品の制作や美術予備校、大人や幼児の絵画造形を指導していた経験がある。大人の絵画指導と子どもの絵画指導の違い、子どもの絵の魅力について感じたことについて記述する。

大人の絵画指導は、『基礎的な学習』『自由に表現する力』『純粋な感性』などが必要であると考える。その中で、まず『基礎的な学習』として、デッサンを行う。モチーフからさまざまな観察をして、理解したうえで、実践を通して形や空間などの認識を繰り返し描き『自由に表現する力』や『純粋な感性』などを大切にしながら制作を行っている。

子どもの絵画指導は、『基礎的な学習』の手続きを踏むことなく（実際には踏めない）「自由に表現する力」や『純粋な感性』を大切にすることが重要である。子どもの絵を指導していて、子どもの中に『純粋な感性』を感じることもある。実際に筆者も子どもの絵の指導を行っているときに同様な場面に遭遇した経験がある。そのなかの事例を紹介する。

【事例】

小学生の絵画造形教室での事例

それは、フロッタージュの技法を使った制作活動を行っていた時に、一人の子どもが数色の絵具を画用紙に塗ったり垂らしたりを繰り返し楽しんでいた場面である。きれいな色ができ、この辺りで作品が完成するかと思っていたが一向に終わる気配がない。そればかりか、さらに絵具の量が尋常でないほど増えていく。しばらくの間見守るようにしていたが子どもの集中力が勝り、声をかけることができなかった。結果として指導者のイメージを超えた作品となり新鮮な経験となった。絵具はある程度の色数により響き合い（美しさ）が見られるが、色を多く混ぜすぎると彩度が落ち濁った色になってしまう。しかしその子の絵具は、

濁ってしまった色にさらに彩度の高い色を加えていくと、部分的な色の響きが始まり濁った色が響き合ってくる。もしも計算高く後先を考え、無駄な行為だと思ってしまうれば決して生まれない表現であった。このことは『純粹な感性』の一つだと考えられる。しかし制作していた子どもは自分の作品には関心を示さず、また新たに制作を続けた。

よくある一場面で、子どもにとってはいつもと変わらぬ活動であるかもしれないが、自らの制作活動や絵画指導を行っている者にとっては、新鮮で新しい発見となった。この様な体験を芸術家は子どもの絵から感じ取っていたのかもしれない。

3. 子どもの絵の表現特徴と芸術家等の作品との類似点と共通性

子どもの絵の表現特徴である①「アニミズム的表現」②「レントゲンの描法」③「集中構図（集中比例法）」④「視点移動表現」「展開表現」⑤「異時同存表現」の5つを取り上げ、これらの表現に類似する芸術家の絵画やプリミティブな絵画の考察を行う。作品の選び方に関しては視覚的にわかりやすいものを選んだ。

①「アニミズム的表現」

アニミズム的表現とは、人間以外のものを擬人化したり無生物を生物化したりする表現である。たとえば太陽や雲、野菜に顔を描いたりする表現である。これは幼児の精神構造が未分化で自己中心的であるためと考えられている。

図1の絵は5歳児の作品である。顔が描かれた雲から雨が降り、雲と動物や昆虫との関係が描かれている。この絵の描画表現の特徴は、アニミズム的表現の他に基底線が描かれており、土の中にはモグラとモグラのトンネルが描かれていることからレントゲンの表現になっている。この様に、複数の描画表現が一つの画面に存在することから、子どもの思考がさまざまなものやイメージと直結していることが伺える。図2の絵は、幕末から明

治にかけて活躍した浮世絵師、日本画家の河鍋暁斎の「動物の曲芸」である。人間が行う曲芸をさまざまな動物が楽しむ姿を超絶な描写力で奇想天外な曲芸を表現している。この作品は、猫とネズミの曲芸や、モグラの空中ぶらんこ、コウモリの綱渡りが描かれている。この「動物たちの踊り」は他にも虫やカエル、蛇などが描かれている。図1の絵は、人間以外のものに顔を描き擬人化しているのに対し、図2の絵では、人間が行う曲芸を動物の姿で描いていることから、アニミズム的表現とは逆の方法で描かれている。見るものの意表をついた発想で描かれた作品である。アニミズム的表現と超絶な描写力で奇想天外な曲芸を表現したと考える。ほかにもウサギ・カエル・サルなどが擬人化されている絵巻物の「鳥獣戯画」にもアニミズム的思考が感じられる。



図1 5歳 男児（皆本二三枝、1991）³⁾



図2 河鍋暁斎「動物の曲芸」
（及川茂・山口静一、1992）⁴⁾

②「レントゲンの表現」

レントゲンの表現とは、外からは見えないはずのものを描く表現である。子どもがものをみる見方は、視覚を重要視する大人とは異なり知っていることや体験したことを中心に表現していると考えられる。

図3の絵は、遠足で乗ったバスの中の様子を感じたままに表現している。外からは見ることができないお友だちの姿を描き、左右の席を上下で表している「積み上げ遠近法」も見ることができる。座席の形や吊革、運転手がハンドルを握るのも表されている。タイヤの大きさやホイールの細かな描写などからタイヤの迫力を感じ拡大表現になっていることから子どもの純粋な感性が読み取れる。ワイパーやマフラーなども描かれていることからバスに乗った体験やバスへの興味関心が良く表れている絵である。図4の伝土佐光起筆源氏物語絵巻 葵卷二（部分）の絵は、建物の屋根と天井を描かない「吹抜屋台」という技法で、斜め上に視点を置き、内部の様子分かるように表現さ

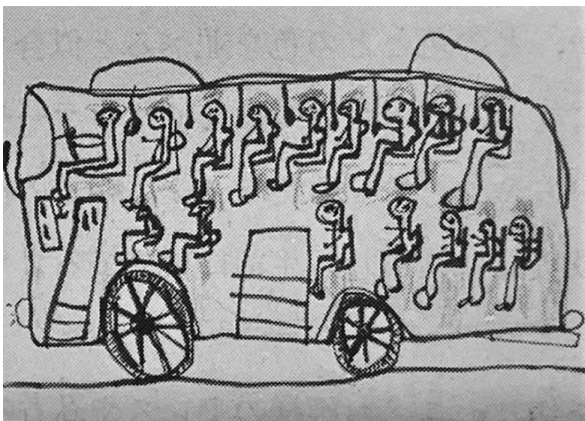


図3 遠足で乗ったバスの様子（大森啓子、1991）⁵⁾

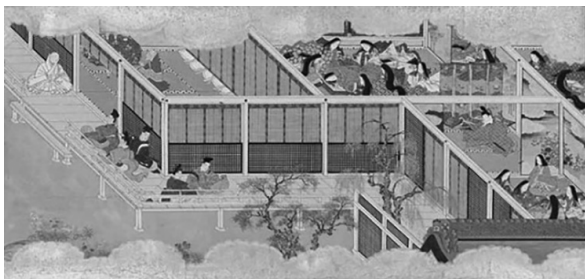


図4 源氏物語絵巻 葵卷二（部分）伝土佐光起筆
（京都国立博物館ホームページ）⁶⁾

れている。この技法は、俯瞰表現的に描き知っていることを描く知的リアリズムと類似性のある表現であると考ええる。

③「集中構図（集中比例法）」

集中構図（集中比例法）とは、幼児期は、もの大きさを相対的に判断する力が未成熟なため、自分の興味関心のあるものや印象深い部分を大きく描く表現である。

図5の絵は5歳児が奇術師（手品師）の演技をみて描いた絵である。奇術師の手の動きに興味関心があり、驚きや尊敬が込められ大きな手が描かれているようである。図6の絵はフランス南西部で2万年ほど前に描かれたラスコー洞窟の壁画の一部である。黒い牝ウシ全体の比率を見ていくと、頭部の大きさは体全体の大きさに対して小さく足部は細く描かれている。このことは、描いた人間が牝ウシの体に関心が強く、頭部や足には注意が向かない状況であるか、または何らかの理由で意図的に小さく描かれていると考える。もし意図的に小さく描かれているのであるならば、「デフォルマシオン」という表現方法が考えられる。「デフォルマシオン」とは、変形、歪曲。情動、欲望、印象など視覚に従属しえない感情、あるいは作者の個性を表現・強調すべく、あえて視覚的再現描写を離れて著しく歪めて描く方法である。また、他に描かれているウシの絵にも同様の比率で描か

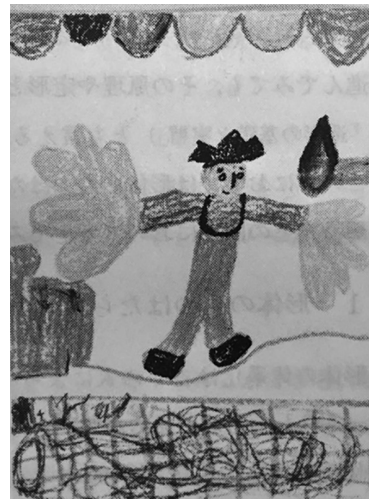


図5 奇術師5歳児（皆本二三江、1991）⁷⁾



図6 ラスコ壁画「黒い牝ウシ」(海部陽介、2017)⁸⁾

れていることが多いことから他の理由も調査していきたい。もしこの絵のウシと描いた人間の関り方によってこの絵の表現の意味が理解されるかもしれないと考える。

④「視点移動表現」「展開表現」

「視点移動表現」とは、一つの視点ではなく多視点で自分の描きたい方向や、描きやすい方向を画面で組み合わせて描く表現である。

図7の絵は、車のカッコ良さを横向きと上面から描きたかったのであろう。子どもにとって現実の空間などは存在せず知っている事や描きたいことを中心として表現された絵である。図8の絵は、上下にひらいたテーブルの脚が描かれている。子どもから見ればテーブルの脚は4つあるので4つ描いた展開表現である。視覚的な見方ではなく知っていることを描く表現方法である。図9は野球場を描いたもので上から見下ろした俯瞰図である。観客は展開表現で描かれている。図10はポール・セザンヌの作品「リンゴとオレンジのある静物」である。リンゴやオレンジ、皿や白布、テーブルなどそれぞれのモチーフは少しずつ傾き歪んで描かれている。それはモチーフを多視点で観察し、画家の描きたい方向や、描きやすい方向を画面の中で再構成して描いている。セザンヌ以降、このような「多視点」の見方や表現は、ピカソや

ブラックなど多くの芸術家に強い影響を与えていくことになった。図11のピカソの絵は「多視点」をさらに研究した結果、キュビズムという描画方法を発明した。いろいろな角度から見たイメージを画面に収める方法は「視点移動表現」と類似する点が多くある。

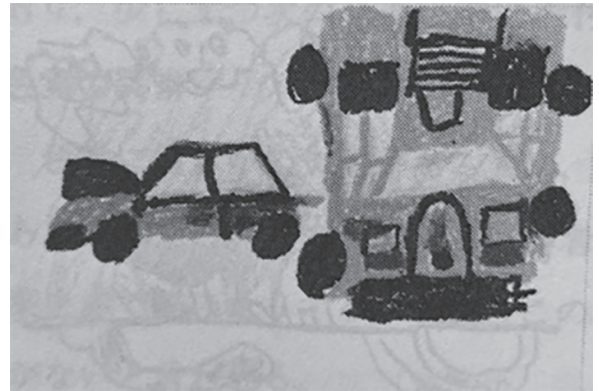


図7 5歳 男児 (皆本二三江、1991)⁹⁾



図8 5歳 女児 (皆本二三江、1991)¹⁰⁾

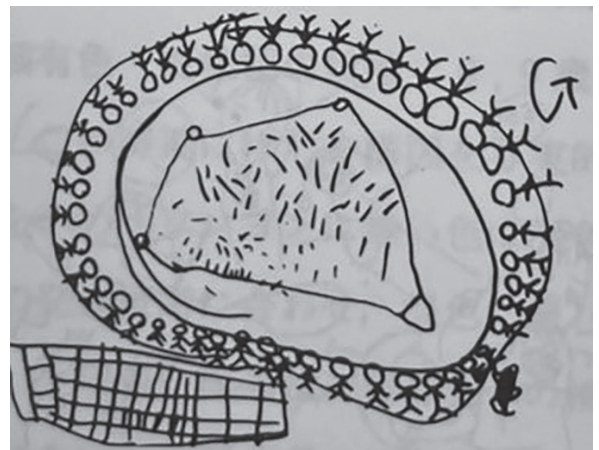


図9 5歳 男児 (皆本二三江、1991)¹¹⁾



図10 ポール・セザンヌ
「リンゴとオレンジのある静物」1899年
(梅原龍三郎・谷川哲三・富永惣一、1969)¹²⁾



図11 パブロ・ピカソ「アビニヨンの娘たち」1907年
(梅原龍三郎・谷川哲三・富永惣一、1972)¹³⁾

⑤異時同図 (異時同存表現)

異時同図法の表現は、連続する話の異なる時間の場面を同一画面に描く方法である。

図12の絵は6歳の作品で、虫が眠っている木を蹴飛ばしたので1匹が落下し、もう1匹が飛び去るところを描いたものである。その逃げていく虫を、2匹の虫の姿と方向を示す記号で異時同存表現にしている。図13の作品は、ミケランジェロによる「アダムとエヴァの原罪とエデンの園からの追放」で、システイーナ礼拝堂の天井に描かれた絵である。アダムとエヴァが、蛇の誘いにの

って禁断の実を手にし、神の怒りによって追放される。連続する話で異なる時間の場面を同一画面に表している異時同存表現といえる。ほかにも日本では、絵巻物があり巻物の紙に右から左へと時間の経過とともに絵が展開していくよう表現されている。



図12 6歳 男児 (皆本二三江、1991)¹⁴⁾



図13 ミケランジェロ・ブオナローティ
「アダムとエヴァの原罪とエデンの園からの追放」
1477年~1480年 (久保尋二・田中英道、1994)¹⁵⁾

4. まとめ

子どもの絵には、発達段階がありその中でさまざまな経験を積み新鮮な驚きや純粋な気持ちが育つことが分かった。また、子どもは主観的で自己中心的であるがゆえに、根源的な捉え方ができ、大人の視点とは違った感性を表現することができた。それは、知っているように描く「知的リアリズム」であることが分かった。子どもの純粋な感性は、芸術家にとって魅力的に感じていたことをクレアやピカソの言葉から読み取ることができた。それは子どもの絵から「芸術の始原」を発見し、子どもの絵から新しい発想や純粋さを見つけ出そうとしていると考えた。さらに子どもの絵の表現

特徴に類似する芸術家等の作品について考察をおこなった結果、子どもの絵からさまざまな表現特徴の知的リアリズムが確認できた。さらにその表現を芸術家は意図的に自分の表現に置き換えることに成功していた。視覚的リアリズムで描かれる写実表現は、長い歴史の中で今後も進むが、子どもが普遍的に持つ自由に表現する力や純粋な感性も必要だと考える。そして知的リアリズムが表現の幅を押し広げ新しい表現の一翼となることを願いたい。

引用文献

- 1) ユルク・シュピラー (2016) まえがき—講義のための著作の成立について—、「造形思考上」、ちくま学芸文庫、pp.16-17
 - 2) 坂崎乙郎 (1980) 作家論—ピカソの創造力—、「世界美術全集 14 ピカソ」、集英社、p.93
 - 3) 皆本二三江 (1991) 幼児造形の表現特徴、「0歳からの表現・造形」、文化書房博文社、p.63
 - 4) 及川茂・山口静一 (1992) 「暁斎の戯画」、東京書籍株式会社、p.13
 - 5) 大森啓子 (1991) 描くあそび 幼児期、「0歳からの表現・造形」、文化書房博文社、p.110
 - 6) 京都国立博物館 HP「京都国立博物館 名品ギャラリー これまでの展示 - 幻の源氏物語絵巻」https://www.kyohaku.go.jp/jp/theme/floor_2_1/f_2_1_koremade/2F-1_20200102.html (2022年1月5日確認)
 - 7) 皆本二三江 (1991) 幼児造形の表現特徴、「0歳からの表現・造形」、文化書房博文社、p.65
 - 8) 海部陽介 (2017) 「世界遺産 ラスコ展」、毎日新聞・TBS テレビ、p.9
 - 9) 皆本二三江 (1991) 幼児造形の表現特徴、「0歳からの表現・造形」、文化書房博文社、p.64
 - 10) 同上
 - 11) 同上
 - 12) 梅原龍三郎・谷川哲三・富永惣一 (1969) 図版 52、「現代世界美術全集 3 セザンヌ」集英社、pp.64-65
 - 13) 梅原龍三郎・谷川哲三・富永惣一 (1972) 図版 18、「世界美術全集 14 ピカソ」、集英社、p.22
 - 14) 皆本二三江 (1991) 幼児造形の表現特性、「0歳からの表現・造形」、文化書房博文社、p.65
 - 15) 久保尋二・田中英道 (1994) 「世界美術全集 第12巻 イタリアルネサンス 2」、小学館、p.106
- ※図2、図4、図6、図10、図11、図13の絵画は有彩色であるがこの論では無彩色で表した。

参考文献

- 1) パウル・クレー、土方定一・菊盛英夫・坂崎乙郎 訳 (2016) 「造形思考上」、ちくま学芸文庫
- 2) 坂崎乙郎 (1980) 「世界美術全集 14 ピカソ」、集英社 1
- 3) 鯨坂 二夫・林 林男 (2006) 「表現 幼児造形理論編」、保育出版社
- 4) 槇 英子 (2018) 「保育をひらく造形表現」、萌文書林
- 5) 皆本二三江 (1991) 「0歳からの表現・造形」、文化書房博文社
- 6) 海部陽介 (2017) 「世界遺産 ラスコ展」、毎日新聞・TBS テレビ
- 7) 京都国立博物館 HP「京都国立博物館 名品ギャラリー これまでの展示 - 幻の源氏物語絵巻」https://www.kyohaku.go.jp/jp/theme/floor2_1/f2_1_koremade/2F-1_20200102.html (2022年1月5日確認)
- 8) カーリン・トーマス (1977) 「20世紀の美術」、美術出版社